

# エンカウンター（ENCOUNTER）

## 第 33 号

平成 17 年 1 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

### 南原繁著作集第 10 巻より(6)

#### われらの歩んだ道（1）

（一高校長の新渡戸稲造）先生が、どういう方法によって、一千人の学生に向かってその教えを説いたかといいますと、これには二つありました。一つは倫理講話。…校長のは、倫理のお話とでも言うべきもので、それは、これよりも狭い講堂で、一年生に向かって行われました。我々は、他の学科はサボっても、新渡戸先生の倫理講話の時間だけは、席を争って、堂を埋めて聞いたものです。先生は何を話されるかという、何も難しい理論は述べない。まずその日に途中で見聞いたこととか、あるいは新聞紙上の出来事などをとらえて話を始めるのです。だが、だんだん話を進めていくうちに、さすがに先生の深い教養と学問が出てくる。これが一高生徒をぐんぐん引っ張ってゆき、我々は先生の教えに耳を傾けたのであります。もうひとつの方法は、特別講義であります。これは有志の学生に対してでありますけれども、相当多くの人が聴いた。ここで私は、始めてゲーテの『ファウスト』を知った。それから、諸君は知らないかもしれませんが、トマス・カーライルという、19世紀イギリスの大思想家の書物を読んだ。これは不朽の名著と私は思います。

## われらの歩んだ道（２）

さて、そういう先生の薫陶を受けた私どもが、いかなる反応を示したか。私どもは、それぞれ友人相語らってグループを作り、書物を読んだ。読書会を開いて議論もした。そして、人生とは何か、真理とは何か、というような、もっぱら人間性の教養のために努力しました。学校の教科書は二の次にして、まず自分を深め、耕すことに力を用いたのが、この時代であります。…顧みて、一高３年の時代ほど、物を読み、物を考えたことはなかった。これが本当の高等学校の教養ではないかと思うのです。これが私どもの時代の高校生活でありました。

ところがここに、不思議なことが起こったのです。われわれは新渡戸先生の教えに刺激されて、それぞれ友人とともに人生を論じ、教養を深めようと努力もした。ところが努力すればするほど、一体自己とは何かという問題にぶつかった。正に煩悶の時代です。

（精神の指導者として、海老名弾正、植村正久、仏教の近角常観等を歴訪した後、）最後に、内村鑑三という人に、いみじくも出会ったのであります。この、内村鑑三先生が書かれた、わずか２０ページばかりの『聖書の研究』という雑誌を読んで、私は感激した。それで先生の門に入るようになった。

ところで、この内村鑑三という人は、これがまた不思議にも、先程申し上げた新渡戸稲造先生と札幌農学校の同期生であります。内村、新渡戸の２人が相並んで秀才として学校の双璧であった。…

先生は、柏木の小さな家に退かれ、この世の一切の仕事を捨てて、聖書一巻だけを携えて、この『聖書』こそ、日本を救う礎石であると考え、先程申したように、青年を集めてその真理を説いたのであります。

### われらの歩んだ道（３）

その終戦の年の暮れ１２月、いわばまだ廃墟の後も生々しく、硝煙のまだ残る中に、はからずも私が、東京大学の総長に選ばれたのであります。その時学内は、研究機関が一切ストップ。ガス・水道も全部停止。これは一般の市民もそうでありますけれども、学者諸君も住む家がない。交通機関も混乱。こういう外的物的条件を復興するためにも、相当の年月がかかりました。しかし、私どもが一番このときに感じたことは、学生は勿論であります、日本全国を通じて、国民一般が、初めて受けた敗戦の打撃によって生じた精神の空白、虚脱状態であります。その時にあたり、私は翌年の２月１１日、学部長会議に諮り、紀元節（今の建国記念日）の式典を敢えて挙行して、総長として就任の演説をしました。それは、何よりも、祖国の復興　この焦土と化した日本を復興するということ、そのためには、新たな精神革命と人間革命が必要であることを力説しました。これはひとり東大の諸君に対してのみならず、全国民、特に青年諸君に訴え、呼びかけたつもりであります。

さて、在職６年を通じて、私に最も感銘の深かったことは何かと申しますと、６年間を通じて教授・助教授・職員・学生諸君　全学が一体となって、文化国家・平和国家の建設と学園の復興のために燃え上がってくれたということです。毎年春行われる卒業式には、戦死した学生の父兄方が、亡くなった子息や弟の写真や遺骨を胸に抱いて列席してくれた。それほど、国民こぞって、新しい文化国家と平和日本の建設に立ち上がったのであります。

## われらの歩んだ道（４）

一方、駐留連合軍司令部の指示によって、日本の改革は続々と行われるに至りました。第一に日本国憲法。今までの天皇絶対主義をやめて、人間天皇、日本国民の象徴として、自由と民主主義の国家を建てるということ。これは日本二千有余年の歴史において初めての革命であります。もう一つは、従来の教育勅語のかわりに、教育基本法を作ったことです。国家の忠良な国民となる前に、まず人間として、自己の識見と教養を高めるということ、それが新しい国家と社会を作る礎石となるということを旨としたものであります。これは、とりもなおさず、私が何十年か前に、先程申した第一高等学校校長、新渡戸先生によって教わった精神、まさにヒューマニズムの精神であります。私は東大総長在任中、学外の仕事は一切辞退してきたが、憲法制定の議会と教育刷新審議会だけには参加しました。だから、その一員として責任を負う者であります。

以来、20年。近頃新聞でご覧になった方が多いかと思いますが、中央教育審議会において戦後の教育改革を再改革しようという運動が起きてきました。新しい教育制度ができてからの経験によって、どうしても誤りと思うところがあれば、それは改革してよろしい。けれども、あの教育基本法の根本精神 人間性理想の上に立った根本精神、さらに所謂6・3・3・4の新しい学校体系、これは正しいものと、私は確信しております。もっとも、この学校体系につきましても、それはあくまで標準的な型であって、将来日本の国力が増進すれば、いろんな変形もあってよいことは当時の決議に認めているところであります。しかしながら、この教育基本法、これは変えることの出来ない、新しい日本の礎石であると私は信じます。

さらに憲法の問題があります。この憲法は占領当時成立したのでありますから、案文があまりにも翻訳的口調であったり、欧米的な表現のところがあります。これらは将来、日本が実質的にも完全に独立国となったとき、書きかえてよろしい。しかし、あの、国際紛

争の手段としての戦争を廃棄して、平和国家の理念を宣言したこと、また、自由と民主主義を謳ったことは、新しい日本の根本理念であり、いささかの変更があってはならぬと、私は思うのであります。

## われらの歩んだ道（５）

近代文明は、先程も申しましたように、この1-2世紀の間に、今だかつてないほどの大きな進歩をとげました。...自然科学の進歩は無限であり、月旅行はおろか、将来何が発見されるかわかりません。けれども、大事なものは、それと並んで文化科学 精神科学の方も、発達して行かねばならないということです。そこで私が、今日特に聞き聞きたいことは、来るべき新しい文化・文明の中で、宗教の問題をどうするか、宗教の占めるべき位置はないのかという大問題が残されているということでもあります。...

それが今日ではどうかといいますと、問題はキリスト教でも仏教でも、おしなべて宗教はあまりにも形式化し、組織化して、生きた生命を失いつつありはしないかということです。来るべき新しい文化・文明の中で、どこか宗教が占むべき正当な位置がなければならぬと私は思うのであります。若い高等学校在校の諸君は、まだそういう問題にはぶつからないかもしれませんが、誰でもまじめに人生を歩こうと思えば、いつの日か必ずや対決せねばならない問題だと思えます。私は先程申したように、学生時代に初めてその道を知って以来六十年、自分を顧みて恥ずかしい限りであります。「呉下の阿蒙」という言葉がありますが、わたしも然りで、ちっともよく変わっておりません。極めて欠点が多く、過ちを繰り返すものであります。それでも今日まで、どうにか私を支えてきたもの、それは何かというと、私の力ではない。私を超えた、何か偉大な力によるものと、堅く信じて疑いません。

けれども考えてご覧なさい。私自身の経験から見ても、人間とは、そんなに偉いものでありましょうか。私は、人間は極めて弱いもの、また利己的な存在だと思えます。この利己的な人間が、自己を犠牲にしても、本当に人のために尽くすようになるには、やはり、人間を超えた何か偉大なものによって、初めて可能になる。そして始めて、人間が本当の人間になると私は思うのであります。

これは私のみでなく、ただ今世界的に有名なイギリスの歴史家、トインビー博士もいっています。この人は、私と同時代の学者であります。この人の歴史観の中心になっているものは何かといえますと、宇宙にはその背後に絶対的実在者があるという思想です。「宇宙の背後の究極の実在者」、これを「神」と呼び「仏」といいたいであります。それを前提とせずして歴史も成り立たなければ世界も理解し得られない、というのがトインビー博士の説です。そして私が先程来申しておる、人間革命・精神革命というのは、その発見のためであります。それによって初めて、歪められ、疎外された人間性を回復できるし、また、汚れ、破壊されたこの自然の回復もできると思うのであります。それを目ざしてこそ、今までの近世文明と違った、21世紀から始まる新しい人類の文明と歴史が展開されると、私は堅く信じます。

## われらの歩んだ道（ 6 ）

しかし、21世紀を以て始まる新しい文明と世界に移り行く前に、一つの大きな難関があります。これを、諸君は通らねばならない。それは何か！ 実に“戦争か平和か”の問題であります。...

戦後26年、ヴェトナムを初め、世界の各地で戦争が行われていますが、今に世界的大戦争にまで至らないのはなぜか。それを抑止しておるのは、あの広島・長崎の犠牲であります。それがなかったら、とっくに原爆をヴェトナムでつかっているでしょう。広島・長崎におけるあの犠牲、数十万のわが同胞を失ったということ。これは日本が世界に対して払った、大きな犠牲であります。でありますから、戦争か、平和かの危局に直面したとき、その前に立ちはだかって、「やめよ！」といい得る国民は誰か。それは日本民族だ、と思う。広島・長崎で犠牲となった幾十万の精霊が、それを叫んでいます。...

いつの日か、あなた方が成人された時代に、もう一度、戦争か平和かを、問われることが必ずある。その日が、必ず来ると思う。そのとき、それを決定するものは、もはや軍部ではありません。また政治家諸公でもありません。それは諸君一人一人、国民自身です。このことは、覚えておいて頂きたいと思います。



## われらの歩んだ道（ 7 ）

私は最後に、先程来申した私の恩師、内村鑑三先生の言葉を思い起こします。先生には、多くの著述がありますが、その中の一つに『後世への最大遺物』という小さな本があります。これはもと箱根の夏期講習会で、先生が講演されたものを記録したものであります。われわれがこの世を去るときに、後世へ、この世へ何を遺したならばよいかということ述べた本であります。諸君は何を遺しますか。巨億の富を遺しますか。それとも巨大な事業ですか。実業家はそれを考えるでしょう。あるいは輝かしい名誉を遺しますか。政治家はそれを欲するでありましょう。それはそれでよろしい。けれども、それは誰にでもできることでなく、それぞれ選ばれた人に与えられることです。だが、ここに一つ、誰にでもできることがあります。後世に残すにたる立派なものが一つある。それは何か。先生は結論して曰く「高尚にして勇氣ある生涯」であると。

高尚とか高貴とかいうのは、何もこの地上を離れて、天的なことを考える意味ではありません。この地上で、毎日の生活の中で、隣人のために、友人のために、自分を忘れても尽くすということ、これが高尚です。いわんや、同胞と全人類のために、祖国が平和か戦争の岐路に立たされた時に、「平和」に組すること。これほど高尚なことはないでありましょう。また、勇氣とは、何も戦場においてのみ、表われる軍人の美德ではありません。日常の生活に於いて、イエスをイエスといい、ノーをノーという、これが勇氣ある生涯であります。私どもの毎日の生活において、然りを然りといい、否を否という。いわんや将来いつか、祖国が戦争への道にさしかかった時、ノーと叫ぶこと。これこそが高尚にして勇氣ある生涯と、私は思うのであります。

## われらの歩んだ道（８）

以上、あまりに私自身のことを、多く申し上げましたけれど、これは本校の一卒業生が創立70周年に際して、母校に帰り来たっての報告であります。同時に、私自身としては、日本の光栄ある時代も、暗黒の時代も、同胞とともに通ってきた一国民としての、私の証言であります。同時に、恐らくは、私の遺書の一部ともなるであります。

こういう言葉があります 「真理の鞭は蹴ることが難しい。」  
真理の鞭は細く弱々しく見えるけれども、これは蹴ることができません。蹴れば自分が傷つく。真理や正義は、直ちに実現しないかもしれませんが、いつかは必ず実現する時が来る。この歴史の歯車は回転が遅いように見える。けれどもこの車の歯はきわめて確実に刻んでいく。これは、私が生涯をかけて学んだ、学問の真理でもあります。

どうぞ、諸君が自重自愛されて、今後いかなる道を選ばれようとも、人として高尚にして勇氣ある生涯を送られんことを願ってやみません。時代は移り、世代は変わりましても、世々相伝えて、この母校が、真理と自由の学園として発展し、また、我々の愛する祖国日本が、正義と平和の国土として栄えんことを願って、私の講演を終わります。

（1971年10月8日、香川県立三本松高等学校創立70周年  
記念式典・記念講演会に